校長室だより

共学共高

第39号

令和５年４月18日発行

発行責任者
白梅学園高等学校長
武　内　　彰

新入生歓迎会、盛況に終わる

新型コロナウイルスは、私たちの生活から消滅したわけではないが、今年度は、通常の教育活動を行うことを目指している。昨年に引き続き、新入生歓迎会（4 月 17 日（土）午前中）を実施することができ、嬉しく思っている。特に、今年は 2 年生も全員参加して臨むことができたことが、昨年と異なるところだ。

新歓実行委員長の 3 年生 S さんも弥生祭実行委員長としての経験を踏まえ、みんなの協力を得ながら上手にとりまとめる力量を十分に身に付けている。開会式の前には、S さんが校長室まで私を迎えに来てくれるという、まさに VIP 扱いをしてくれて感激だ。

「大いに楽しんでください」という S さんの開会宣言を皮切りに、吹奏楽部の演奏が始まる。演奏曲は「崖の上のポニョ」と「ジャンボリーミッキー」の 2 曲だ。前者は 2 月の定期講演会でも披露された曲でもある。新入生たちにもなじみの深い曲であろう。いくつかの楽器のソロパートもあって、演奏力の高さが伝わってくる。後者も誰でも知っている曲であろう。部員全員が楽しそうに演奏している様子が伺える。演奏後には、新入生と 2 年生から大きな拍手が送られた。

舞台上での演奏の合間に、部活紹介が行われる形式は昨年と同じである。4 回に分かれて、各部の紹介が行われ、そのたびに新入生から拍手が起きる。新入生を見ていて私が感じることは、上級生たちの演奏や上演、説明の時に、高い集中力をもって受け止めていることだ。私は新入生のすぐ脇にいて、その様子を見ていて気付いた。何事も集中力があるということは、いいことだ。新入生たちの可能性を垣間見ることができた。

舞台では、引き続き、ダンス部、書道部、合唱部、箏曲部、バトン部、そして軽音楽部のパフォーマンスが披露される。ダンス部は、さまざまなジャンルの踊りを披露してくれる。テンポがよく、衣装も創意工夫されていて、2 年生からは歓声も送られていた。書道部は恒例の書道ガールズたちによる大きな作品をその場で完成させるパフォーマンスだ。筆で書き始める前にひざを折ってその後にばねのように伸ばしてから買いだす姿に特徴がある。完成作品が披露されると、新入生たちからは「おおっ」という声が漏れた。メッセージも文字もなかなか素晴らしい作品だ。

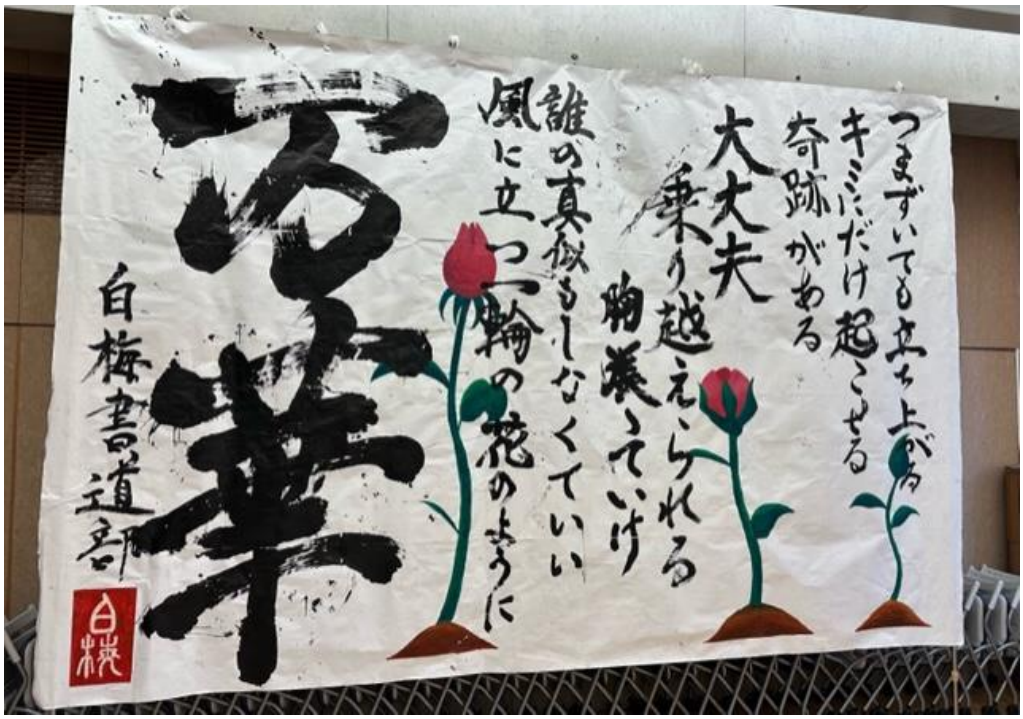
合唱部は、10 人に満たない人数だが、透き通るような歌声を披露してくれた。マスクをしていた昨年とは異なり、明るい笑顔で歌っている部員が複数みられ、こちらまで楽しい思いにさせられる。曲目は、「ツバメ」と「世界はあなたに笑いかけている」であった。

演劇部が披露したのは、「丘の上の動物園」だ。部員たちが動物に扮し、白梅学園高校が沖縄修学旅行ではなく、この動物園にやってくる想定で、どのように迎え入れるか知恵を出し合うストーリーだ。これもオリジナル脚本であろう。観る者を引き付け、楽しませてくれる内容であった。

箏曲部は、「ディズニーメドレー」と「千本桜」を披露してくれた。お琴でディズニーメドレーには驚かされたが、なかなか趣のある演奏だ。昨年よりも部員が増えている様子が伺え、全員で力を合わせた立派な合奏であった。

休憩時間中に、バトン部が上演前に第 1 大体育館脇で待機している姿をみつけた新入生から思わず「可愛い！」との声が上がる。チア用の衣装を身にまとった部員を見ての感想である。舞台上での踊りやバトン演技も華やかで見ごたえのあるものであった。バトン演技の際の衣装は手作りだという。なかなかのものである。笑顔も素敵だ。

軽音楽部は 3 つほどのバンドが演奏を行った。オーディションを経て選抜されたメンバーが出演していると思われる。ボーカルの声量も十分で、音程もしっかりしている。アーティスト名は聞いたことがあるが、私の知っている曲は、さすがになかった。ジェネレーションギャップを感じる。どの曲もバランスのとれた演奏であった。何という曲なのか、後程、部員から情報収集することにしよう。



部活動紹介もそれぞれ特色があったが、驚いたのは生徒会の変化である。バトン部のようなボンボンをもって踊りながら紹介するとは、生徒会のイメージが変わった・・・いえ、よく考えて、全校生徒に身近な生徒会を演出したのであろう。

もう一つ、宣伝も兼ねて、バドミントン部の紹介の時には「顧問の先生はＮ先生と・・・・校長先生です！」と部員が言うと、新入生からは驚いたような反応があった。1 年 1 組の脇に座っていた私にスポットライトが当たったので、思わず起立して手を振ってしまった。これでバドミントン部の仮入部に来る新入生が激減したら、私の責任だ。

開会式から閉会式まで、司会を務めてくれたのは委員のＩさんと放送部の Ｍ さんの二人だ。二人ともとても聞き取りやすい声で、心の籠った素敵な司会進行を務めてくれた。

全体的に実行委員会の生徒たちが前面に出て、この歓迎会をつくっている印象がより強くなってきたと感じる。もちろん、生活指導部や顧問の先生たちの影の苦労があってのことだろうが、雨の中、楽器を運ぶことでさえ大変なのに、円滑な進行で時間通りに終えることができたのも素晴らしいことだ。上級生としてはじめて歓迎会に同席した 2 年生たちも会を盛り上げてくれた。委員長のＳさんが「盛り上がるかしら？」と心配していたが、杞憂に終わった。

新入生のみなさんが、教科の学習以外に何か一つ挑戦するものを見つけて、自分の居場所をつくり、共に高め合ってくれることを期待せずにはいられない。

（共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）